

水辺デザインの要諦

早稲田大学創造理工学部 教授 佐々木 葉

はじめに

ヨーロッパの都市の要は広場と街路。日本の都市の要は山と川。客観的に証明せよといわれても困るが、たびたびそう思う。山は遠方に眺められる。したがってそれ自体をデザインすることはできない。山への眺望をどう都市に引き寄せるかということになる。これに対して水辺は、都市を囲み、貫き、めぐる。そのあり方自体が日本の都市設計の基軸となっていた。そういう水辺をどうデザインするかは、さまざまな面で疲弊した街や地域を蘇生させるために、極めて重要な意義があると思う。水辺は人の体のツボのような場所で、そこを適切に刺激することで血の巡りがよくなり、全体が徐々に元気になってくる。病んだ部分を外科的に手術して直すのではなく、適切な場所を丁寧に刺激しながら全体の免疫力を上げていくこと。そういった漢方的な治療が現代の都市や地域にも必要なのだと思う。ここでは、土木学会のデザイン賞¹⁾を受賞した事例などを通じて考えたことを述べてみたい。

地域のツボとなる水辺

なぜ水辺のデザインをしようとするのかといえば、それはその水辺をとりまく周囲一帯に暮らす人々に豊かな時間を提供するためである。水辺にたえずむひととき、魚釣りをするとき、水遊び。もちろんこうした直接的な水辺での時間だけでなく、その水辺が健全で健康であることによって担保される地域の環境、防災性の向上による安心で豊かな暮らしの時間。こうした総合的な価値と意味を獲得することを目的として水辺をデザインしてほしいと思う。

次に、水辺が地域のツボとなる可能性が高い理由として、水辺は様々な人々の様々な興味からのまなざしが注がれる場所であり、まちづくりのプラットフォームとなりやすいということがある。例えば、生き物に興味のある人、ヒートアイランドや風の道、あるいは水質のような都市環境問題に興味のある人、歴史や祭りなどの地域の生活文化への関心、子どもの遊び場など教育的観点からの興味、魚釣りや舟遊び、水辺でのキャンプやバーベキューなどのレジャー、散歩や運動という健康への関心、もちろん防災も。このように水辺は日常的な市民生活の興味と実に多くの接点を持つ。私自身は長らく景観のことを考えているが、景観は以前に比べれば多くの人

々の関心事になってきたとはいえ、必ずしもすべての市民が積極的に関わろうとする事柄ではない。水辺の景観も大切なテーマではあるが、それ以外の多様な興味が交錯する場所として、水辺はやはり地域のツボといえるのだと思う。

水辺のツボへのアプローチ

以上のように地域のツボとして水辺を位置づけたならば、そこへはどのようなアプローチが考えられるだろうか。まずは個々の具体的な場所の整備に入る前に、まちのなかでの水辺の位置づけを尊重した計画が必要となるだろう。土地利用や空間利用に対する戦略である。それと合わせて、地域のどこの水辺に光を当てていくか、これを的確に押さえることが大切であると思う。その方法は、地域と水辺の種類によって千変万化ではあろうが、歴史的に治水や利水の要となっていた場所、地形的な節目といったことを手がかりに探していくことで、目星が着いてくるのではなかろうか。まちとの接点という観点も重要である。パブリックアクセスのとれる場所、人が日常生活なかで足を伸ばそうと思う場所。今現在そうなくてもそのポテンシャルがあることは重要である。

このようにして、広域的な観点からツボとなる水辺が見出されたならば、今度はその水辺のなかで、さらにどこがデザインのツボとなるかをよく考えたい。空間は幾重にも重なった入れ子構造として読み解くことができる。おおよそこのあたりが大切と特定された空間の中でも、さらにこのあたりが肝心、というように。水辺の形や背後地との関係、そこからの眺望などに注意を払いながら、水辺のツボを探していく。こうしたアプローチが考えられる。

広島を例にとってみよう。広島には城も平和記念公園も平和大通りもあり、これらは街の骨格を成すとともにシンボルともなっている。しかし、この街のまちづくりの機軸の一つはやはり太田川をはじめとするまちの中心部を流れる川に終始置かれてきた。その具体的なアクションは、まず、戦災復興都市計画の時点で河岸緑地を設けたことに遡る。また戦後の都市美の推進施策の一環として、河川にそって一定幅(200m)の区間に対してデザインガイドラインを提示して協議をすすめること(広島市リバーフロント建築物等美観形成協議)を長らく行って

きた²⁾。橋についてもまさに街のツボとなる位置に戦後かけられた平和大橋と西平和大橋には、その高欄デザインをイサムノグチに依頼した。さらに、中村良夫先生による基町護岸のデザイン（土木学会デザイン賞2003特別賞受賞）に始まり、各所の水辺テラスに質の高いデザインの整備を行ってきた。大野美代子さんによる橋詰を大切に鶴見橋のデザイン、近年では平和大橋歩道橋のデザインコンペ、さらに雁木と呼ばれる階段という歴史的遺産を活用した雁木タクシーや、京町川の水辺のカフェテリアなどの活動が生み出されている。これらは街の機軸の河川に対する総合的で戦略的なデザインの好例であると思う。



広島京橋川のリバーサイドカフェ



広島の雁木タクシー

あるいはまた愛知県豊田市を流れる矢作川は、矢作川方式と呼ばれる上下流一体となった環境への取り組みがあるとともに、空間としては豊田市中心部において矢作川緑地の指定をS36年に行っている。このことが市街地を貫く川でありながら、水辺に立つと街の喧騒がまったく感じられないほどの豊かな緑に包まれた風景体験を可能としている。それを踏まえ古鼠水辺公園（土木学会デザイン賞2007優秀賞受賞）というツボを的確にとらえた水辺空間整備が行

われた。洪水被害による護岸の復旧として取り組まれた整備は、単なる防護にとどまらず、川の楽しみを知り尽くした人々の総合的観点からの整備が行われることとなった。その結果いつ訪れても豊かな時間を過ごしている人々の姿を見ることが出来る。石組みの水制工や河岸の樹木の伐採と残し方、さりげなく置かれたベンチとなる長い石など、まさにミクロな空間のツボを押さえたデザインも見ることができ、それはまた東海豪雨でふたたび被害を受けた後のヴァージョンアップした再生という、成長するデザインへとつながっている。



豊田市の都心部にありながら緑地に囲まれた矢作川



古鼠水辺公園にはいつも人の姿がある

水辺の主役は水

次に考えたいのは、何をデザインするか、ということである。水辺のデザインといえは、つい護岸や水辺のプロムナードの整備を思い浮かべてしまう。しかし、水辺は水があるからこそ水辺である。その水辺の根幹である水をどのような状態にしたらよいかを考えたい。時刻や季節、天候によって様々に変化する水の流れが健全であること、生き生きとしていること。それを見抜くにはいささか訓練が必要である。きれいなだけでなく、豊かな流れ、つまり

生態系のダイナミズムを育む流れを取り戻すことは、どのような川においても重要となる。滞筋、瀬、淵、洲。こうした言葉をもって水面を眺めるだけでも見え方は異なる。この主役となる水とその流れを作り出すデザインこそを、環境としても治水としても重要な目標としたい。そのためには河床や河道の整備だけではなく、沿川と流域でのハードソフト含めた総合的な取り組みが必要となる。

北海道の網走川では、魚たちをはぐくむための川づくりが進んでいる³⁾。そのための基本は、水の流れにダイナミックな多様性を与え、それを川自身が維持できるようにするための工事である。滞筋を通し、瀬と淵をつくり、洲が適切な場所に生み出される。そうした本来の川が持っている水の流れのリズムと多様性を川にふたたび取り戻すこと。それによって主役である水の流れが生き生きとしてくる。そのためにつくられた水制工や落差工、掘られた淵などは直接目に見えなくなってくる。すべては水の流れのための仕掛けである。



網走川かつくみ活潑のダイナミックな水の流れ

一方都心においては、流量をコントロールしたささやくような流れも水辺の魅力となる。現代的な事例でこのことを強く意識したデザインの例に残念ながらまだ出会っていないが、京都をはじめ歴史的な水路の計画には、鑿水という造園手法に通じる配慮が感じられる。水質の維持とともに水量の安定化は水を使うという実利的な目的のためにも重要であった。直接的に水を使わなくなった現代でも、例えば安藤忠雄による高瀬川べりの建物タイムズは、やはり都市ならではの人工的な流れの表情の魅力を楽しむためのデザインといえよう。このような流量のコントロールは、流域としての取り組みがなければ成立しない。水辺が地域再生の要となる理由は、点を考えるために線、面での取り組みを必要とするということにもある。

水辺を楽しむ人

生き生きとした水を眺め、時にそこに直接触れることは、なんとも豊かな体験である。楽しくはしゃいだり、悲しみをそっとこらえたり。そうした様々な時間を人が過ごせる場所として水辺はあってほしい。川岸や橋、水辺の道や緑地、東屋や建築などといった人が立ち入る空間と構造物は、その造形自体の美しさ以上に、それが提供する人の居場所としてデザインしたい。そしてそうした場所に人がたたずんでいる姿が絵になり、かつそれを眺められる場所があること。水辺に沿って、あるいは水を挟んでここに展開する水辺を楽しむ人の場所の連鎖で、緩やかな場を作りだし、賑わいをかもし出す。それは、水と水辺を見守るまなざしとなる。いつも誰かがそこにおいて、またそこにいることが不自然でないこと。釣り人がいる。犬の散歩をする人がいる。水遊びをする子ども達がいる。こうした人が点景となった水辺はとても魅力的である。デザインはすべてそのための気付かれたい演出であってほしい。

高密度に宅地が広がる横浜を流れる和泉川の東山の水辺・関が原の水辺（土木学会デザイン賞2005最優秀賞受賞）では、鋼矢板護岸の見捨てられたような川であったものを、20年もの時間をかけてまるで自然の小川のように再生した。ここでも川だけでなく背後の斜面林の保存など総合的な戦略として取り組まれている。その結果できあがった空間には、そこかしこに水辺を楽しむ人の姿がある。流れに直接触れることができるような部分、全体を眺めるに恰好な視点場となる橋、家々とのつながりとなる川沿いの道、ちょっとした東屋。これらがこれ見よがしなゾーニングに寄らず、空間の機微を読み込んだ的確な配置となっている。これはアーバンデザインの優れた事例としてみることもできる。



和泉川の再生された流れ(土木学会HPより)

命を吹きこむ施工

水辺のデザインにおいて、そこに使われる材料と施工は、強調しすぎてもしすぎることがないくらいに重要である。特に自然石を使った場合には、その加工と積み方の巧拙が、どんなによく考えられた設計であっても最後にその成果を左右する。地形なりに微妙に変化する面や複数の面が出会う部分や端部のおさめ方ではもちろん極めて顕著に、そして定規断面にしたがった単純な面でもやはりその技の違いが現れる。こうした違いも水の流れの表情の違いと同様に、相互に比較してみないと気付かない。自然石を使ってある、というだけの見方では見過ごされてしまう。現在の工事ではコンクリートを使わない完全な空積みでの施工はまず難しい。したがってコンクリートの表面に石が使われるわけだが、その際の目地の仕上がり、下方から上方そして天端に至る石の大きさバランスとの流れ、エキスパンションの位置や挿入されるシートの見え方、排水パイプのおさまり。これら比較的わかりやすいチェックポイントの他に、しっかり見れば違いがすぐにわかるが、それこそ数値やチェックリスト化しづらいこと。これをぜひしっかりと抑えた仕事ができるような工事発注と監理が水辺デザインにおいては、とても重要であると最近つくづく思う⁴⁾。

秋田県横手川（口絵写真）の仕事は、河岸の櫓を守るための柔軟な対応とともに、その石積みの仕事の丁寧さで特筆すべき事例である。貼ったのではなく、積んだと呼べる石垣。全体に漂う品はまさにその施工の仕事の出来栄えに因る。その一方で、計画とデザインにおいては実に重要でまさにツボをおさえた質の高いプロジェクトである佐賀県の喜瀬川石井樋地区（土木学会デザイン賞2008優秀賞受賞）の仕事は、最後の最後で残念な結果になっていた。大量に使われた自然石がまるで生き生きとしていない。プロジェクトの内容が大変すばらしいだけに、とても残念であった。

石積みでなくても、アースデザインと呼ばれる地面の微妙な起伏、造形も水辺の風景と空間の味わいを決定する。先述の和泉川では大きな地形模型を作成し、きめ細かく等高線を引いた図面をもとに現場での丁寧な施工が行われた。阿武隈川渡利地区（土木学会デザイン賞2004優秀賞受賞）でも、なだらかな起伏を現場での丁寧な監理と施工によって実現し

ている。定規断面の単純な形でもなく、恣意的な曲線でもない、まさに自然な形を人工的に作る技術の重要性を示す事例だ。



横手川の護岸に見られる施工の技の違い

おわりに

私自身は水辺のデザインの仕事を直接行った経験はない。したがって、以上に述べたことは極めて直感的であって、様々な制約条件を汲んだ上でのコメントにはなっていない。しかし、その分一般市民の目に近いかもしれない。時にはそうした一般の人間の目、しかも街や水辺のことを大事に思うプロの市民の目になってみることも重要ではなからうか。さまざまな常識や制約にとらわれずに丁寧に水辺を観察すること、水に直接触れること、胴着をきてじゃぶじゃぶ流れをあるくこと、舟にのってみること、まちから水辺まで歩くこと、しげしげと地図をながめること。そうした無垢な時間の蓄積から優れた水辺のデザインはうまれてくるのではないかと思う。

文献

- 1) 土木学会デザイン賞については、土木学会景観・デザイン研究委員会のホームページを参照のこと
<http://www.jsce.or.jp/committee/lsc/prize/index.html>。
また後述する事例については、デザイン賞ギャラリーの項目から受賞年度ごとに見ることができる。
- 2) 西村幸夫+町並み研究会「日本の風景計画—都市の景観コントロール到達点と将来展望」学芸出版社pp.156-158
- 3) 網走川での取り組みについては、以下も参照されたい。佐々木葉「網走川の挑戦」CE建設業会2010年2月号、
- 4) 石積みの仕事については、以下も参照されたい。佐々木葉「[人]依存の仕事の再生を」土木施工2009年10月号